

奄美医科学研究施設・学友会合同セミナー（プログラム）

開催日時：2026年2月24日（火）13：00 ～ 14：00

開催場所：医科学研究所1号館講堂

開催形式：対面およびオンライン（ハイブリッド開催）

zoom URL：

<https://u-tokyo-ac->

[jp.zoom.us/j/84118256009?pwd=j95b2w2DRBj0YntnaTSDldSvChL4K3.1](https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/84118256009?pwd=j95b2w2DRBj0YntnaTSDldSvChL4K3.1)

ミーティング ID: 841 1825 6009

13:00-13:05 開会挨拶

司会：真下 知士

（奄美医科学研究施設・施設長）

13:05-13:25

演題：奄美医科学研究施設の近況報告

講演者：川合 覚

（奄美医科学研究施設 特任研究員）

13:25-13:55 【学友会セミナー】

演題：野生動物医療の治療現場から生まれる学術研究

— 奄美大島における実践事例 —

講演者：新屋 惣

（奄美野生動物医学センター センター長）

13:55-14:00 質疑応答・閉会

主たる世話人：真下 知士・奄美医科学研究施設

世話人：川合 覚・奄美医科学研究施設

奄美医科学研究施設の近況報告

講演者：川合 覚

(奄美医科学研究施設 特任研究員)

概 要 :

① ポリビアザルの繁殖とヨザルの飼育：奄美施設では、ヒト寄生性の熱帯熱マラリア原虫が感染可能なポリビアリスザルの繁殖と7頭のヨザルの飼育を行っている。ポリビアリスザルは妊娠期間約150～160日、1年に1回出産し、産子数は通常1頭である。当施設では5歳以上の雌雄を12月～2月にペア飼育を開始し、妊娠が確認された母体を単独飼育に変えて5月～8月に出産を迎える。2025年は8頭の新生児が誕生し、現在は合計42頭を飼育している。近年、順調に繁殖できている要因としては、マーモセット用に開発された妊娠診断キットの応用により早期診断が可能になったことや、リモートカメラによる24時間の監視体制が整ったことなどがあげられる。

② マラリアに関する研究：2023年に全面改築された第3棟・感染実験棟においてマラリアに関する研究が行われている。施設内にはBSL2およびBSL3病原体の取り扱いが可能な設備が整っており、熱帯熱マラリア原虫の培養や、媒介蚊であるハマダラカの人工吸血、そしてポリビアリスザルを用いた*in vivo*感染実験が行われている。現在これらの実験系を統合するなかで、特に熱帯熱マラリア原虫が肝臓へ侵入する発育ステージに焦点を当て、肝臓内で免疫を誘導する技術の開発に取り組んでいる。

③ ハブ毒の研究：奄美群島では現在でも毎年20～30例ほどのハブ咬症が発生しており、2025年は14年ぶりに死亡例も発生した。奄美施設のハブ毒やハブの生態に関する研究は、1902年の開設当初から行われており、奄美群島のハブ対策に大きく貢献してきた歴史がある。現在は当施設を利用する共同研究者（九州大学・柴田弘紀博士のチーム）により、ハブ毒を遺伝子レベルで解析し、島嶼集団間の遺伝的多様性を明らかにする試みが進められている。

野生動物医療の治療現場から生まれる学術研究

— 奄美大島における実践事例 —

講演者：新屋 惣

(奄美野生動物医学センター センター長)

概要：奄美大島は世界自然遺産に指定され、高い生物多様性と独自の生態系を有する地域である。奄美野生動物医学センターでは、アマミノクロウサギやリカケスをはじめとする奄美群島固有の希少野生動物を対象に、保全および医療活動を展開している。交通事故、人工構造物への衝突、感染症などを原因として保護収容された野生動物に対し、獣医療チームとして診断・治療を実施している。野生動物の治療および飼育管理の過程では、多様な生体サンプルや臨床情報が得られ、これらは学術研究へと展開可能な重要な研究資源となる。当センターでは特に、野生動物が保有する病原体に着目した研究を進めている。具体例として、アマミノクロウサギにおけるトキソプラズマ症およびレプトスピラ症、ケナガネズミにおける広東住血線虫症、野鳥における各種寄生虫感染症などが挙げられる。本発表では、感染症分野に加え、現在進行中の非感染症分野の研究事例についても紹介する。これらの研究成果の多くは、野生動物の治療・飼育という実践的医療活動を通じて初めて得られるものであり、臨床現場と学術研究の接点に位置づけられる。野生動物医療を単なる治療にとどめず、学術研究へと発展させる可能性について議論したい。